

討論会「どうする？日韓アジア基金のこれから」

さる9月18日の年次総会の後に、討論会を実施しました。これは現状の説明をおこなった総会の延長線上に位置するもので、「今後の日韓アジア基金はどのような活動をおこなっていくべきか」について参加者同士が忌憚なく意見を交わしました。以下に詳細をご報告します。

日時 2005年9月18日（日）14:00～17:00

会場 アジア文化会館 101 教室

プログラム I 部 講演「カンボジアにおける取り組みと課題」

ポット・リティ氏 ポンロック・タマイ ディレクター

高橋久夫氏 シャンティ国際ボランティア会（略称 SVA）

広報課課長

II 部 全体ディスカッション

「今後、日韓アジア基金はどのような活動を行うべきか」

【イ・ジェウ氏挨拶】韓国事務局の現状について

討論会に先立ち、韓国支部スタッフのイ・ジェウ氏に、現状把握の一環として、韓国事務局の現状について説明していただいた。財政的にも人員的にも厳しいと言わざるをえないようだ。しかしその一方で「ウ代表が韓国に帰ってきたら韓国事務局も再度活性化させ、日本スタッフと同様にがんばります」と、力強い言葉も受け取った。

リティ氏にとってはもちろん、われわれにとっても韓国の現状を直接スタッフの口から聞く機会は貴重な。みな熱心にかれのひとことひとことに耳を傾けていた。



イ・ジェウ氏

【I 部】

リティ氏、高橋氏の順で講演が行われた。

まずリティ氏が昨今のアンロンコン・タマイ村の状況を報告する。それによると、われわれ以外にも3つのNGOが活動をはじめたという。それによってアジア未来学校の子どもたちを取り巻く環境にも変化が生じている（詳細は17日のミーティング報告参照）。こうした現状に加え、総会で示されたような限られた予算に少ない人手。その中で日韓アジア基金は今後どのような方針で活動をしていくべきなのだろうか。

この問いに対し、ひとつの参考になればとの考えで、SVAの高橋氏に活動の紹介をしていただいた。SVAは



ポット・リティ氏

約 15 年前からカンボジアで教育支援活動をしている NGO で、いわばわれわれの大先輩にあたる。かれらの具体的な活動は①図書館事業②学校建設事業③伝統文化事業の 3 本柱からなるが、今回は特に①に焦点をあてて話していただいた。



高橋 久夫氏

【Ⅱ部】

高橋氏の話した図書館事業に対し、リティ氏を含め参加者は大変興味を惹かれたようだ。このような事業をアジア未来学校にも導入できないか、という話にはしばし花が咲いた。

しかし議論が広がるにつれ、目的を失い、どのようにして導入するか？という小手先の部分に視線が注がれがちになる。何のための図書館事業なのか。このことを常に念頭に置かなくてはならない。

そこでスポットライトがあてられたのが、「識字能力の維持」という観点であった。現在、日本では当然のように文字に囲まれて生活している。新聞も本も無い家庭はまずないだろう。だがカンボジアではどうか。たとえ学校で文字を習って読めるようになったとしても、その能力を発揮する場がないのだ。これはリティ氏によるとアジア未来学校の周辺でも例外ではないという。それを何とか解決できないものか。これに対して「謄写版の導入」という具体的な案も提示された。また小学校での教科書不足を問題視する声も上がった。

全体を通してひとつの結論を出すというまでには至らなかった。しかし、私は一定の論点を洗い出すことには成功したと見ている。カンボジアという「大きな」フィールドで日韓アジア基金という「小さな」団体は何をどうすべきなのか。これからも、絶えず自らに投げかけていかなければならない問いである。

(細谷)



出席者一同